森鷗外の「甘瞑の説」

「生命の質」への一視座

世界はひとり實（レアール）のみならずまた想（イデエ）のみちみちたるあり（山房論文・七）

髙橋正夫

〔要旨〕鷗外の「甘瞑の説」は、よく知られているように、「甘瞑〈Euthanasie〉とは安く死するの謂のみ」と云う書き出しで始っている。その注目すべき医学論文の真意義は、而しながら単に「オイタナジー」に対する近代日本初期の、臨床医学的指針と云うだけではない。むしろそれは真の意味での「生命の質」〈Quality of Life〉とは何であり、又その発現と保全とは如何に果されるべきかを、特に終末期患者に対する実地看護要領として縷々教示したものに外ならない。その意味において、それは、いま最も期待されるべき医学的な臨終行儀の実践によってこそ、始めて真の意味での「生命の質」に対する視座の定立が可能であるとの事実を、判然と物語って止まない。

キーワード――安らかな瞑目、生命の質、終末期看護、臨終行儀

日本医史学雑誌第四十六巻第四号
平成十二年十二月二十日発行
平成十一年十二月十一日受理
平成十一年　四月十二日受付

一

明治二十五年（一八九二）一月二十五日、鷗外は其の第二十八号『柵草紙』に、「エミール・ゾラが没理想[1]」を発表し、併せて「附録・一」として「醫にして小説を論ず[2]」を掲載した。

この「醫にして小説を論ず」（後に「醫學の説より出でたる小説論[3]」、明治二十九年（一八九六）十二月、『月草』、春陽堂発行に収載）は、元来、明治二十二年（一八一九）一月三日、帰国月余の彼が『讀賣新聞』紙上に、「醫學士・森林太郎」の署名と共に発表した「小説論[4]」（cfr. Rudolph von Gottschall, Studien）を其の源泉とするものである事は又よく知られている。

鷗外の最初の文芸評論・「小説論」は、（当時、坪内逍遙（安政六・一八五九～昭和十・一九三五）の『小説神髄[5]』や、二葉亭四迷（元治一・一八六四～明治四二・一九〇九）の『浮雲[6]』等を先導とし乍ら、漸く文学近代化の胎動を見せ始めていた、わが国明治二十年（一八八七）代初期の、自然主義〈写実主義〉文学運動の潮流にあっても特に）、逍遙の帰納的・没理想的・科学的写実理論の中に、歴然と看て取れる、エミール・ゾラ（Zola, Émile Éduard Charles Antoine, 1840～1902）の科学的・自然主義的「実験小説」の臭味を痛撃することに依って、逆に、鷗外自身の主観的・演繹的・理想主義的な文芸理念を天下に闡明したものである。そして其のようなボレミックな鷗外の姿勢が、やがて更に『柵草紙[7]』を創刊（明治二十二年・一八八九・十月）することに依って、逍遙との間に所謂「没理想論争[8]」（明治二十四年・一八九一・十月～明治二十五年・一八九二・六月に亘る）を展開して、日本近代文学史上に華々しい一頁を画した事実もまた周知の通りである。

しかしこの小論の主眼は、元より明治二十年代初頭の日本文芸界に、「総指導者の如くに立ち現れ[9]」、忽ちにして「文芸界の最高権威と目される」に至った文学者・鷗外漁史に対する論評に在るのではない。そうではなくて、「醫にして小説を論ず」る、其の当の医家・鷗外森林太郎自身の内部に、（斯くも徹底してゾラ流の実験小説〈写実主義〉を批判して止ま

ない彼自身のその深奥に）、一体いまわれわれは何を見、何を知らねばならないかと言う問題性こそが、小論目下の最大主意でなければならないと云う事である。

鷗外は、問題の其の「小説論」、或は「醫にして小説を論ず」の最後で、それぞれ次のように断言して憚らない。「余は醫なり。一把解體の刀久しく拳を離れず、一條煮藥の筒屢々指に觸るれども、事實を捜究するの熱心は未だ曾つて無何有の郷に遊ぶの夢を妨げず」[10]と。或はまた「我神無何有の郷に遊びて、我眼極致の北斗を睨するも、また何の不可なることかあらむ」[11]とも。

明らかに、鷗外には人間存在が本来運命的に背負うところの、其の本質的な「無何有郷」性、或いは宇宙間的生存性への、熱い視線が生動して熄まない。そこには正に、あの死の床にわが身を横たえながらも、なお窓外の遙かなる「氷の山の巔に棚曳く雲を眺め」[12]やる、セガンティニ（Segantini Giovanni 1858〜1899）の視線と全く同質の、謂わば、彼も我も共に大いなる「宇宙の間で生存する」[13]、個々独立の存在性に外ならない事実への、限りない愛着の眼指しが躍動する。別言すれば、「無何有郷に遊び、極致の北斗を睨する」ことは、常に浪漫派芸術家の本領のみではない。むしろ其の事自体が、人間存在（或いは人間的「生命の質」）の、宇宙間的存在性に関わる、根源的な認識契機でもなければならない。医家・鷗外一流の浪漫主義的な人間観・世界観への本質的な開示がそこに在るのである。

だとすれば、次に医家・森鷗外の「人間」〈其の遙かなるものとの関わりを運命的に背負う存在性〉への凝視の実際が、審らかにされねばならない。そして畢竟それは、人間の生・死の定命に対する敬虔な直視と待応、とくに死に向いつつも尚生きようとする、「末期の人間」に対する真の介助と看病とは何かについての、実地医学的な示教ともならずには居ないであろう。何故ならば、所謂「ターミナル・ケア」における「生命の質」の重視の問題とは、本質的には「殺那変遷」[14]的に生・死を繰り返して止まない、永遠にして根源的な真生命の、其の遙かにも大いなる活動・循環の一部に帰属し、還帰すべき問題性であると観念し得てこそ、始めて其の「生命の質」の真の発現、或いは保全とは何かと云う、本来の

意味とも契合するに違いないからである。

鷗外の「甘瞑の説」が、（以下に判然と見て取れるように）典型的な臨終行儀の教範である事によって、却ってまた個々の実存的生命を、遙かにも大いなる真生命の位相に向けて嚮導・還帰せしめるための、其の命終における真の看取りであり、祈りでもあり得たのだとの確たる意義がそこにあろう。

二

『鷗外日記』の、明治三十一年（一八九八）五月二十二日の条に、「甘瞑説等の譯抄に從事す[15]」とある。

鷗外の右の「甘瞑の説」は、「甘瞑〈Euthanasie〉とは安く死するの謂のみ[16]」と云う書き出しで始っている。だがその注目すべき医学論文の真意義は、単に「オイタナジー」に対する近代日本初期の、臨床医学的指針と云うだけでは無いであろう。寧ろそれは、何故に人〈医〉は人〈病者〉に対して、其の命終の瞬間まで心を尽し、手当の限りを捧ぐべきかに就ての、深い医療哲学とその倫理の示教である。亦そうである事によって、真の意味での「生命の質」とは何であり、更には其の保任・充実は如何に果されるべきかに就て、人を深切に教導・覚醒せしめずには居ない、正にいま最も期待されるべき医学的な「臨終作法」の書なのである。

ところで、人は一般に鷗外の「甘瞑の説」に触れるとき、率然として其の背後に、「病人をして甘じて瞑せしむる」事に、如何にその心身を削り尽さずには居られなかった人々の苦しみと傷みとを、如実に形象し果せた同じ鷗外漁史の、幾篇かの名作を想起せずには居られない。例えばそれは、周知の『金毘羅[17]』であり、また『高瀬舟[18]』等である。其の日常勤勉・真摯な「小野先生夫妻」の、死に瀕する吾が幼な子を眼の前にして、思わずも其の安楽死を考えずには居られない気持や、所詮助からぬ弟の断末魔の苦痛を、少しでも和らげてやりたい一心から、敢て弟の死そのものをも早めて仕舞う、正直一途の「喜助」の哀れむべき心根に、深い同情を読み取ることによって、人は改めて、「安く死するの謂」

とは何であるかを、切実に想い知らされずには居ないからである。

近代日本における一個の類稀れな精神史にあっては、医家・森鷗外の「甘瞑の説」と、文豪・鷗外漁史の『金毘羅』・『高瀬舟』とが、其の文脈上まさに表裏一体的であると云う事実は、いま尠からず注目に値するものと云えよう。洵に実存的人間の一人一人の所謂「生命の質」の向上・充実とは、啻にそれぞれの臨終・末期に際して、俄かに他動的、介護的に高められるべきものだけでは無いのであろう。寧ろ、人間的生・死の全過程に亘る、その日常普段の勤勉、真摯な、まさに「よく生きる」ための自己抑制的な、或いは遙かなる大いなるものとの繋りの自覚による、生命的営為に裏付けられることに依ってのみ、（今わの際においてもまた其れは）、彼・我通底的・呼応的に行持・現成される、と云うことでもあろうか。

そうで有るならば、鷗外の「甘瞑の説」とは、実際に如何なる内容のものであるのか。彼は既述の如く、其の医論の冒頭に、「甘瞑〈Euthanasie〉とは安く死するの謂のみ」との一句を据え置いた後で、大要次の如くに書き示している。

「醫の病人をして甘じて瞑せしむるは、その責の最も重大なるものなり」。「醫術は死を遅くするを以て得たりとすべからず。能く死を安くするに至りて始めて備れり」[19]。

「ここに豫め決すべき一問あり。そは醫に病人の苦を救はんがために、死を早くせしむる權利ありやと云ふことなり。曰く斷じて無し。縱令病人は苦悶のために責められて、醫に強請せんも、醫は決してこれに應ずべからず。これに應ずるは殺すと同じくして、病人を殺すは猶生人を殺すものなればなり。況や所謂不治の症は動き易き概念にして、その間々一時輕快することあるは、實際に名醫の免るゝこと能はざるところなるをや」[20]。

これは明らかに「ヒポクラテス医学の伝統を継承する医の倫理を説いたもの」[21]に外ならない。実に「甘瞑」のための真の医療実践こそは、まさに「患者への誠実、献身的な愛情、および毅然たる医学的識見の証しとしての真のパターナリズムの發揮」[22]に依ってのみ、善く叶えられるべきものであろう。

そして其の事実は、以下に続いて展開される鷗外の所論によって益々明白である。

「醫の應に行ふべき所には、精神上（傍点原著）の手段あり。（最後まで）病人をして生活の望を維持せしむることその最も重要なるものなり」。「醫已に望を絶てり。（然りと雖も）決して其病人を見放すこと勿れ」。「醫は止むことを得ずして、直にその或は不慮の死あらんことを告ぐることあらん。而れども其際猶一縷の望を繋がしめざるべからず」[23]。

死床の重篤患者にも、最後まで「生活の望」を与えよ、との医家・鷗外の臨終者看護の医戒は実に感動的である。人は恐らく、この近代日本における医・文両全者の切々たる医言に出会うたびに、（それから凡そ四半世紀の後に、同じく医・哲兼備の令名を現代思想史に擅にする、精神医学の泰斗にして、二十世紀有数の実存哲学者たる）カール・ヤスパース（Jaspers, Karl, 1883〜1969）のあの名言、「（医師は）患者に対して、たとい現代医学の知識と技術の最善をつくして後、その死に行く場合にも、なおその墓の彼方に希望の樹を植えることを忘れてはならない」[24]、を改めて鮮烈に想起せずには居られない。

三

国手・鷗外は、医のまさに力を致すべき「甘瞑の手段」について、其の格調高い医学論文の後半を更に以下の如くに展開する。

「斷末魔（アゴニイ）（ルビ・原著）の時、冷汗出でば（ママ）、綿巾もて拭ふべく、手足厥冷せば温水瓶もて煖むべし。床は高かるべく、軟にして窪まざるべく、頭高く足卑かるべく、時々直し正さるべし」。「死に臨みて起坐せんと欲し、又立行せんと欲するもの間々あり。其心に任せて扶け坐し、扶け行かしめて可なり」[25]。

「病人の周圍は安靜なるべし。病人をして騒擾を覺えしめ、哭泣を聞かしめんは不可なり。後世或は病人をして好

き音樂を聴いて瞑せしむるが如き事あるを得んか[26]」。

何と云う剴切、周到にして、適に間然するところなき医の倫理の至極、終末看護の範型であることか。特にいま「音楽による緩和ケア[27]」が末期医療現場の、一つの卓れた手法として評価されて居ることは周知である。此の時、鷗外がその出色の「甘瞑の説」において、逸早く（一世紀もの以前から）、判然と「病人をして好き音樂を聴いて瞑せしむるが如き事」への指摘を為し得ている事実は、真に見事な先見性と言うべきものであろう。

人は誰であろうとも、わが人生の末期を斯る大医の看取りの許に静かに迎えたい、と願わずには居られないであろう。

「燈は明くして眩せざらんことを要し、屏風は餘り床に近からずして、充分高く又闊からんことを要す。死に近づくものと雖も、飲食の快なきにあらず。最も宜しきは冷なる清水なり[28]」。

死の床に繞らされるべき「屏風[29]」の設え方から、命終の「末期の水」の心得に至るまでの、この整々として微塵の遅滞もない臨終作法の次第に触れるとき、人はそこに歴然と、平安中期の名僧源信・惠心僧都（天慶五年・九四二～寛仁元年・一〇一七）の、あの『往生要集[30]』就中その「臨終の行儀」によって、安楽国への「決定往生[31]」を欣求し続けて来た日本人の長い文化的伝統に、改めて切なる深い想いに捉われずには居られない。そして、日本文化の根底に深く培われながら、其の日常性の中で、謂わば「不断念佛[32]」的に一筋に行持されて来た、日本人のその生・死相即の秘儀、或いは伝統的な臨終行儀が、其のまま実に現代終末医療の原点として、聢と承当・面授されようとする一瞬に、今こそわが躬を以て立ち会う、と云う思いであろう。鷗外の思想性の深さと、その感性の瑞々しさに、あらためて粛然たらざるを得ない。

鷗外は、其の「甘瞑の説」の末尾に、括弧付きながら、「本説は伯林大學助教授 Martin Mendelssohn の文の要略なり[33]」と断り書きを付している。然しこれは単に当時先進的なドイツ医学論文中の、著名な一篇の「譯抄」に止まる、と云うべきものではないであろう。それどころか、ここには顕らかに、帰朝後十年、改めて日本の伝統的文化と風土の基層に

向けて、其の「二本足」[34]を確乎として据え直した医家・鷗外漁史の、謂わば「西洋文化の眼を以て東洋文化を觀察」し直すことで達せられた、明哲にして創造的な、真に実践的論策とその提示が有るのである。

この「病人をして甘瞑せしむる」ための臨終の用心・作法に関する重厚、強靱な文体には、明かに「人生の医師」[35]・鷗外森林太郎の真骨頂が躍如であると云わねばならない。

鷗外の「甘瞑の説」の大尾は、次の如き結句を以て卒わる。

「意識忘失せば、水もて唇舌を潤すべし」[36]。

此處には応に、これから永い遐かなる「往生」の旅路に出立たんとする故人への、「死ぬるとなおもいそ、生るるとおもえ」[37]との、深くも重い手向けの禱りがこめられて居よう。実に東洋的、或いは大乗的な生死一元・「生滅相續」[38]の世界観に據るところの、静寂にして厳粛な臨終の行儀と云わねばならない。

跋

この小論は、第九十九回・日本医史学会での演題、「鷗外の『甘瞑の説』」に、改めて追加・補整を試みて成文化したものである。為念に付記する。

参考文献

(1) 森鷗外『鷗外全集』（以下『全集』、但し原著・ルビは原則として全て省略）、第二十三巻、八四～八七頁、岩波書店、東京、一九七三
(2) 森鷗外『醫にして小説を論ず』、『近代評論集Ⅰ』、「日本近代文学大系・57」、八六～八七頁、角川書店、東京、一九七二
(3) 森鷗外『全集』、第二十二巻、一～二頁、「全・解説」五三六頁、岩波書店、東京、一九七三

（4）森鷗外『全集』、第三十八巻、四五一～四五二頁、岩波書店、東京、一九七五
（5）坪内逍遙『小説神髄』、「日本近代文学大系・3」四〇～一六五頁、角川書店、東京、一九七四
（6）二葉亭四迷『浮雲』、岩波文庫（以下『岩文』）、岩波書店、東京、一九七二
（7）森鷗外「柵草紙の山房論文」、『全集』、第二十三巻、一～八四頁、岩波書店、東京、一九七三
（8）逍遙・鷗外論争『現代文学論大系』・第一巻「明治時代」、九六～二一三頁、河出書房、東京、一九五六
（9）川副国基『近代評論集Ⅰ』・「解説」、「日本近代文学大系・57」、二〇頁、角川書店、東京、一九七二
（10）森鷗外『全集』、第三十八巻、四五二頁、岩波書店、東京、一九七五
（11）森鷗外『近代評論集Ⅰ』、「日本近代文学大系・57」、八七頁、角川書店、東京、一九七二
（12）森鷗外『青年』、『全集』、第六巻、二九九頁、岩波書店、東京、一九七二
（13）森鷗外『サフラン』、『全集』、第二十六巻、四六二頁、岩波書店、東京、一九七三
（14）宇井伯壽『佛教汎論』、第一篇「佛陀」、第二章「初期の佛陀觀」、第二節「佛陀の超人性」、二四頁、岩波書店、東京、一九四七
（15）森鷗外「明治三十一年日記」、『全集』・第三十五巻、二七一頁、岩波書店、東京、一九七五
（16）森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇五頁、岩波書店、東京、一九七四
（17）森鷗外『金毘羅』、『全集』、第五巻、五二一～五六七頁、岩波書店、東京、一九七二
（18）森鷗外『高瀬舟』、『全集』、第十六巻、二二三～二三五頁、岩波書店、東京、一九七二
（19）森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇五頁・前段、岩波書店、東京、一九七四（以下此の「甘瞑の説」・「注」に限り、書店、所在地、出版年は省略）
（20）森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇七頁・前段
（21）杉田勇「いのちの哲学―生と死」、『いのちの哲学―いま生命倫理に問われているもの』・一七頁、北樹出版、東京、一九九七
（22）高橋正夫「生命倫理学の地平―医療倫理の視点から」、『杏林大学研究報告・教養部門』・第十四巻、一〇五頁、杏林大学、東京、一九九六

(23) 森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇七頁・後段
(24) 南原繁「現代における学者の使命」、『日本の理想』〈中に原著者によるKarl Jaspers: Die gdee des Arztesからの当該引用の訳文あり。但し、本引用者は原文未確認〉、一六〇頁、岩波書店、東京、一九六四
(25) 森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇八頁・後段
(26) 森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇八頁・後段
(27) 星野一正『国際バイオエシックス研究センター・ニューズ・レター』、No. 22・京都女子大学・宗教・文化研究所、京都、一九九六
(28) 森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇八頁・後段
(29) 良　忠『看護御用心』、『臨終行儀』、第一節、浄土宗（天台宗を含む）、一四五頁、北辰堂、東京、一九九三
(30) 源　信『往生要集』、巻中大文、第六「別時念佛」中、第二「臨終の行儀」、「日本思想大系・6」、二〇六頁、岩波書店、東京、一九七〇
(31) 『今昔物語集・三』、巻第十五、第一章、二十二段、「日本古典文学大系・24」、三四九頁、岩波書店、東京、一九六一
(32) 『石清水不断念佛縁起』、「群書類從」、釈家部、四二七、續群書類從完成会、東京、一九六〇、乃至、『岩波・仏教辞典』六九三頁、岩波書店、東京、一九八九
(33) 森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇八頁・末尾
(34) 森鷗外『鼎軒先生』、『全集』、第二十六巻、四二三頁、岩波書店、東京、一九七三
(35) 高橋義孝『森鷗外』、「作品・『なかじきり』解説」、「現代作家論全集Ⅰ」、二〇一頁、五月書房、東京、一九五七
(36) 森鷗外『全集』、第三十三巻、六〇八頁・後尾
(37) 可　円『臨終用心』、『臨終行儀』、第一節、浄土宗（天台宗を含む）、二〇九頁、北辰堂、東京、一九九三
(38) 宇井伯壽『佛教汎論』、第二篇「教法」、第二部「各論」、第一章「有門の自利教」、第四節「輪廻と業、煩悩」、第二「輪廻」、一六九頁、岩波書店、東京、一九四七

（杏林大学保健学部・倫理学研究室）

"A view of *Euthanasie*" by Ohgai Mori: A Viewpoint on the Quality of Life

Masao TAKAHASHI

Ohgai's "A view of *Euthanasie*" opens, as is well-known, with the defining line, "Euthanasie" means peaceful repose.

The true meaning of this noteworthy medical essay, as we are now convinced, is not merely a guiding principle in "Euthanasie"—that is, the aspiration for a painless, peaceful death, as it was used in the clinical medical science of Japan in the earliest stage of modern times. Rather, we should understand that Ohgai wished to argue in detail and enlighten us upon the Quality of Life in its true meaning and how it could be realized and maintained in the practical nursing of patients in the terminal stage of life.

This interpretation of Ohgai's view allows us to understand that such affirmative and creditable medical decorum regarding the "solemn and ceremonial function of man's last moments" makes it possible to stabilize our viewpoint of the true meaning of the "Quality of Life".